

剣道における指導者の理想像
- トップアスリート選手育成のための指導 -
Research on the ideal leader in kendo
- Guidance effective to promote excellent player -

1K06B186

指導教員 主査 堀野博幸先生

平田 啓

副査 矢野 尊之先生

Ⅰ. 序論

私はまず、スポーツ選手が試合で実力を発揮するにはどうしたらいいのかを考えた。将来的に私は、剣道の指導者の立場に立つ可能性が高いため、これを考えていく中で、どの様な指導をすれば実力発揮度の高い選手を生み出すことができるのだろうかというところに視点が変わっていった。試合で高い実力発揮度を示せるトップアスリート選手を育成するための指導はどの様なものか、またそれができる理想的な指導者像を明確にしたいと考え、剣道を題材として、本研究を始めた。

Ⅱ. 研究目的

指導者の理想像を明確にすることは、将来指導者の立場に立つ可能性の高い私はもとより、より多くの指導者の指導レベルの向上、またそれに伴う選手の競技能力の向上に貢献できるのではないかと考え、本研究をはじめた。

Ⅲ. 研究方法

アンケートによる調査を、大学の剣道部員とその指導者を対象に約 200 名に実施した。幅広い競技レベルの大学の剣道部を選び、その学生と指導者の間における指導に関しての意識調査を行った。そこに表れる意識の共通点や相違点を見つけ、その背景となる環境や競技レベル等と照らし合わせて、どうすれば指導者と学生(選手)との意識の差をより小さくし、指導の浸透度を上げられるかを考えた。収集したデータは得点化し、その得点を平均値±標準偏差で示した。各大学

間での得点の関係を、分散分析を用いて解析し、優位水準は 5%未満とした。事後検定は、Tukey 法にて多重比較検定を行った。その後、各質問項目において、各大学で比較検討した。

Ⅳ. 結果

分散分析によると、有意水準 5%で有意差があり、多重比較によってそのうち T 大学と Su・G 大学との間で有意差が認められた。各質問項目において、競技レベルの高い T 大学では学生と指導者の意識に差は見られず、競技レベルの低い Su・G 大学では意識の差が顕著に表れた。

Ⅴ. 考察

全体的に、競技レベルが高い大学ほど学生と指導者の意識に差がなく、競技レベルの低い大学ほど学生と指導者の意識に差が見られたため、指導の浸透度が高ければ競技レベルも高まることが示唆された。その他の質問項目における大学間の比較により、学生と指導者との間でのコミュニケーションと指導内容が重要な要素であると考えられた。競技レベルの高い大学の学生と指導者はその間でのコミュニケーションが盛んであり、その効果で信頼関係が生まれ、目標も一致するが、競技レベルの低い大学の学生と指導者の間ではあまりコミュニケーションが上手く取られておらず、その影響で信頼関係が築けず、目標も一致しないということが示唆された。また、学生全体を見ずに視野の狭い指導をしたり、気に入った学生だけに指導が集中したりすることは、競技レベル向上の妨げになりかねないと考えられた。よ

って、剣道における指導者の理想像とは、競技指導はもちろん、教育的指導にも同じように重点を置き、選手との間に意識の差がないかを常に気にしながら上手くコミュニケーションを取り、広い視野を持った指導ができる指導者であると考察した。